

中世墓の展開について

—伊勢原市西富岡・長竹遺跡の事例を中心として—

高橋 香

1. はじめに

ヒトは亡くなると、どこへいくのか。その屍は火葬された後、「お墓」という定められた空間の中に葬られる。昨今、樹木葬や海に散骨する事例もあるが、「お墓」に埋葬されることがまだ多い。墓地は、開発が予定される場所にあると移築を余儀なくされ、改葬される。発掘調査をしていると、改葬されたはずの墓地跡から稀にお骨が残っていることがある。この残されたお骨は後にお骨の子孫へもたらされるか、見つからない場合は無縁仏としてお寺で葬ってもらう。「ほとけさん」というように亡くなった人を「佛」として扱われるのが現代のお墓事情であるが、では、古代や中世のお墓事情はどうだったのだろうか。古代の人々は、身分高き人は火葬され、一般民衆はそのまま放置されていたという。平安京にみられる「化野」「鳥辺野」というような「野」といわれるところは埋葬の地とされ、穢れの空間として存在していた。『餓鬼草紙』にみられるように、墓のある人、そのまま野垂死状態になっている人がおり、身分による墓の差別化はあったといわれている。一方、東国など地方はどうだったのであろうか。発掘調査で確認される中では、官人層はやはり火葬により埋葬され火葬墓が展開し、一般民衆は土坑墓などの墓であったとされている。中世の段階になっても、この傾向はかわらなかったようで、在庁官人やいわゆる僧侶とされる一般民衆と区別される人々は火葬で葬られ、民衆レベルの人は土坑墓に葬られたようだ。

今回、中世火葬墓の調査をすることとなり、お墓について考える機会を得た。葬られた人がどういう過程を経て、この地に眠ることとなったのか、少し考えてみたい。

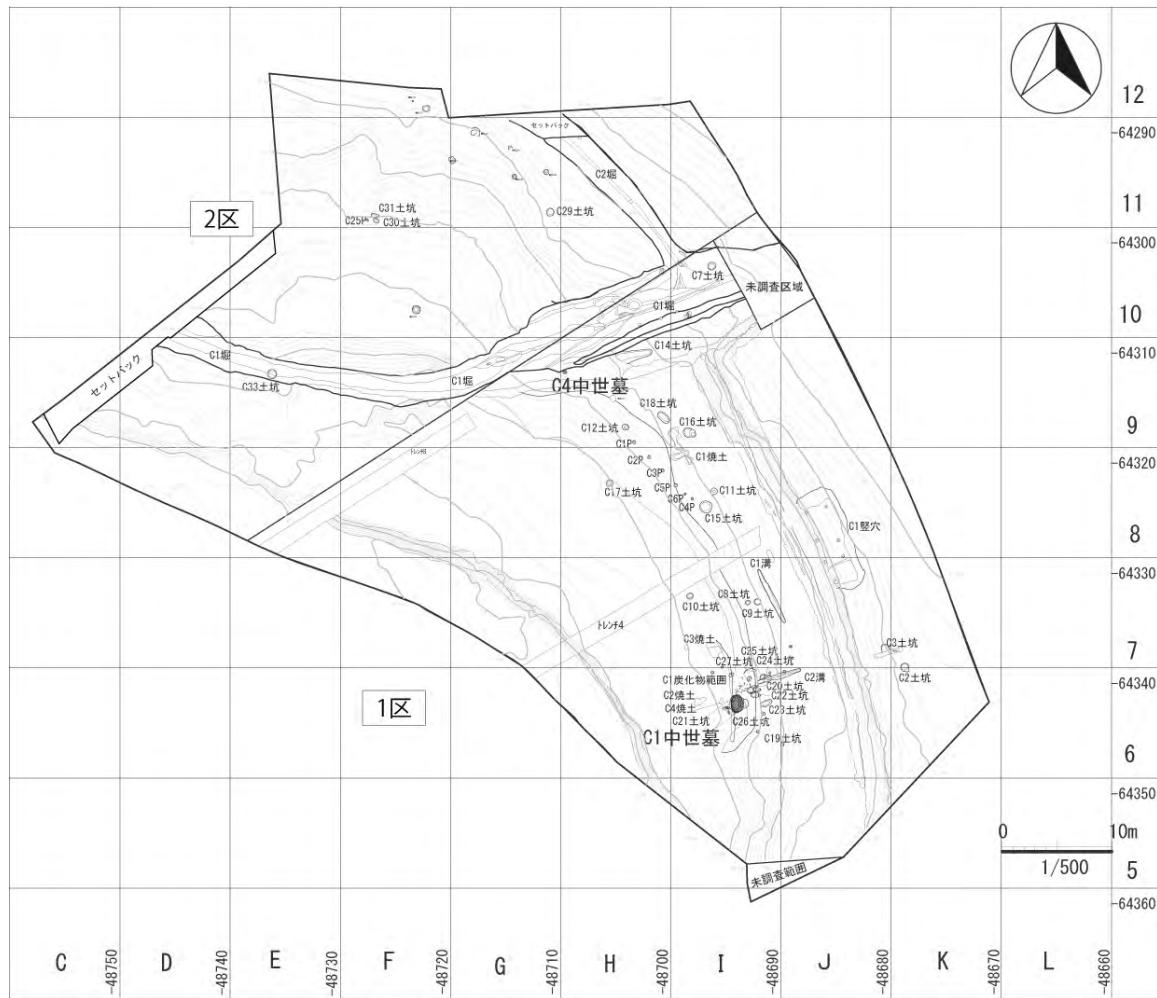
2. 西富岡・長竹遺跡の事例について

西富岡・長竹遺跡は、伊勢原市の北東に位置し、大山を源流とする鈴川によって形成された上粕屋扇状地の東側縁辺部付近あたり、この扇状地を東西方向に横断するように流れる渋田川とその支流に挟まれたやせ尾根状台地に立地している（第1図）。遺跡の範囲は、南西—北東約3.0km、北西—南東約7.0kmの規模で、今回の調査地点は南西



第1図 遺跡位置図

部分にあたる。調査地点はやせ尾根状台地から縁辺部に位置し、東側では標高約55.0m、西側では標高約47.0mと南西側に傾斜する地形である。本遺跡はこれまでに6回の調査が実施され、各時代において成果があげられている。近世では、第2・3次調査において大山へむかう道状遺構が確認されたほか、耕作地としての土地利用があつたこと、中世では、第2次調査では鍛冶関連の遺構と推測される竪穴状遺構が確認されているほか、第1・5次調査では堀状の遺構がみつかっている。第4次調査では石塔の一部が埋納された掘立柱建物跡が確認されるなど中世遺構の分布が濃い。奈良・平安時代においては、各調査で竪穴建物跡が検出されているが、まとまった分布はみられない。伊勢原市内の台地上では集落が形成される時期ではあるが、長竹遺跡周辺では顕著ではなく、本遺跡から北西に位置する上粕屋・一ノ郷遺跡、上粕屋・一ノ郷上遺跡、また本遺跡から南東に位置する台地上の西富岡・向畠遺跡周辺に集落の中心がみられる。弥生時代から古墳時代についての遺構は少なく、明確な遺構はこれまで確認されてはいない。縄文時代については落とし穴が各調査を通じて数十基検出され、地形にそつた形で確認されている。住居址はこれまで確認はされていないが、各調査区で縄文土器が出土しており、その傾向をみると、前期以前の土器は出土せず、中期後葉の土器が主体である傾向がある。よって、現在調査された地点よりも北側～北東に位置するやせ尾根上のわずかな平坦面に集落が展開していた可能性が高い。本調査地点を含む遺跡の南側は、斜面地であることから落とし穴による狩り場域であったと考えられる。旧石器時代の調査においては、第2・3次調査の調査成果として、



第2図 西富岡・長竹遺跡 中世遺構配置図

6 時期に亘る文化層の存在が明らかにされている。各文化層に大きな特徴をもつ石器群が認められており、特に第Ⅱ文化層とした L1H 層上部文化層から、代官山段階と野岳・休場段階の間に位置する可能性がある細石刃石器群と大・中・小型の尖頭器石器の石器製作址が確認されたことは大きな成果とされている。また、表土下 8 m を超えさまで調査が実施され、その最下層の B4 層で第Ⅳ文化層が確認できたことも重要とされている。

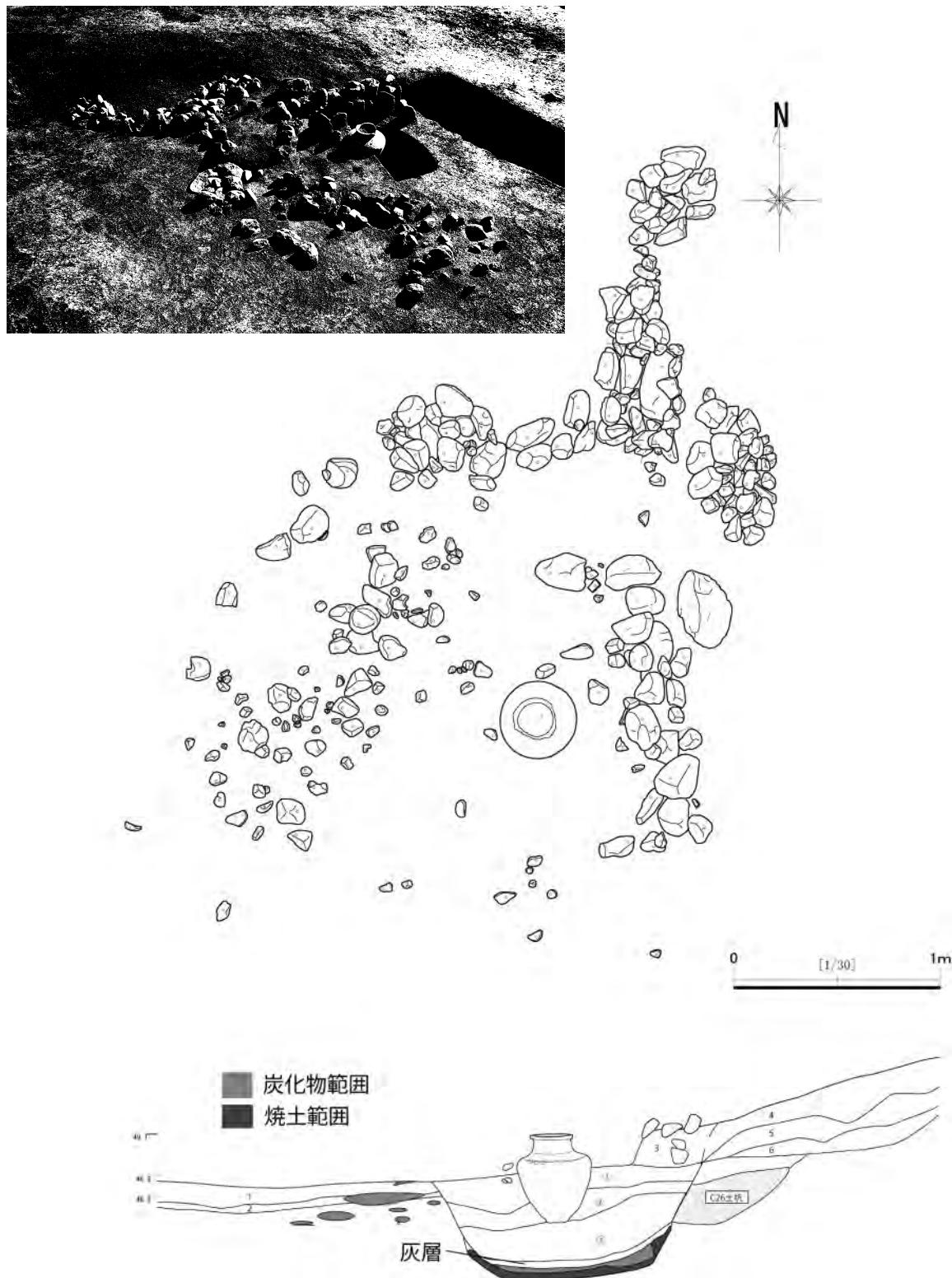
各時代調査成果のある西富岡・長竹遺跡であるが、次に今回とりあげる第 7 次調査の中世の調査成果を述べる（第 2 図）。調査区は 2 分割して実施し、1 区は令和 3 年度に、2 区は令和 4 年度に実施した（（公財）かながわ考古学財団 2022）（註 1）。

中世では、調査区北東部において第 1 ・ 5 次調査で確認されている堀状遺構の延伸部分がみつかった。調査区の東西を長さ約 52m、最大幅約 6 m、深さ約 2 m の規模を測る堀（C1 堀）で、断面形は V 字状を呈し、一部薬研堀の形態を示す。堀は調査区北西へさらに延伸する。堀の覆土を観察すると、1 区の調査時・東側では水が流れたような痕跡はなく、自然に埋没したものと考えられる。1 区調査時には西にむかって延伸すると想定していたが、2 区の調査を実施した結果、北側へも伸びる様相が確認された。北側へ伸びる堀（C2 堀）の断面形は北側の底面幅は約 0.8m の台形を、南側の底面は約 0.4m 幅の箱型を呈し、上端幅約 1.4m、長さ約 15m、深さ 1.2 ~ 1.3m の規模を測り、調査区北側へさらに延伸する。堀東側の肩からピットが 1 基確認されているが、北側へ伸びる形状をとるため、詳細は不明である。出土遺物がほとんどなく、古墳時代後期の須恵器甕片が出土したのみで時期判断は難しいが、隣接の調査成果から中世の遺構と判断される。C1 堀は C2 堀より西側において底面の様相が変わり、H10 グリッド以西から砂泥互層の堆積がみられ、非常に湿潤な堆積環境となる。考えられる要素として、H10 グリッド付近が地形変換点にあたり、湧水を利用して建設された可能性が高い。堀の北側に約 1.5m の円形状を呈する遺構がみられ、湧水環境を利用して井戸として使用した可能性が考えられる。G9 グリッド以西は低地の様相になり、木製品が数点出土している。中でも、頭頂部を加工した板状木製品や木製椀、曲げ物を含む加工品や自然木がまとまってみられた。板状木製品は、形状から「物忌札」の可能性が高く、表面には墨痕が確認されているが、釈読不明である。なお、樹種同定作業を行った結果、樹種同定した 29 点のほとんどが針葉樹で、割材としたものの一部に広葉樹が認められたこと、柄杓の柄の部分が出土しているが、樹種がイチョウであり、中世資料でのイチョウは珍しいとの指摘があった。出土遺物はかわらけ、青白磁、白磁、陶器などが出土しており、12 世紀後半～14 世紀代と幅広い。

I8・9 グリッドでは、焼土範囲が確認された。周囲に径 0.5cm 程度のピットが 6 穴並び、柵列状に確認された。焼土の他、炭化物も含まれていたことから茶毬跡の可能性も考えられる。

J7・8 グリッドでは堅穴状遺構が検出されている。土坑状の落ち込み内に 1 × 2 間のピットが確認できたことから、堅穴状遺構と判断した。南北約 10m、東西約 3 m の規模を測り、深さは西側が近世の段切りによって削平されているが、最も深いところで 70cm を測る。柱穴の間隔は桁行が 1.7 ~ 1.9m、梁行が 2.1 ~ 2.64 m であった。遺物は渥美窯の甕胴部片が 1 点出土している。

I6 グリッドでは中世墓が確認された。拳大の礫が散漫と確認されたことから便宜的に集石墓として記録をとったが、蔵骨器の下部から火葬の痕跡が確認されたことから、一体を中世墓として整理した（第 3 図）。県の試掘調査において壺の口縁部が既に確認されていた場所で、周囲を掘り下げると人頭大～こぶし大の礫がおおよそ 3 地点にまとまりをもって検出された。礫の下からは土坑が数基重なって検出され、複数のきりあいが確認されている。壺（蔵骨器）の周囲を精査したところ掘り方が確認され、壺（蔵骨器）は底面に接



第3図 西富岡・長竹遺跡 中世墓

地して埋めるのではなく、少し埋めてから正位置の状態にして埋め戻されていた。周辺に、山茶碗の底部片が確認されており、蓋の可能性がある。掘り方覆土には、骨片や炭化物、焼土等が含まれている。また、掘り方下面からは、茶昆跡と推定される円形の土坑が確認された。直に焼き上げられたのだろうか、焼土が土

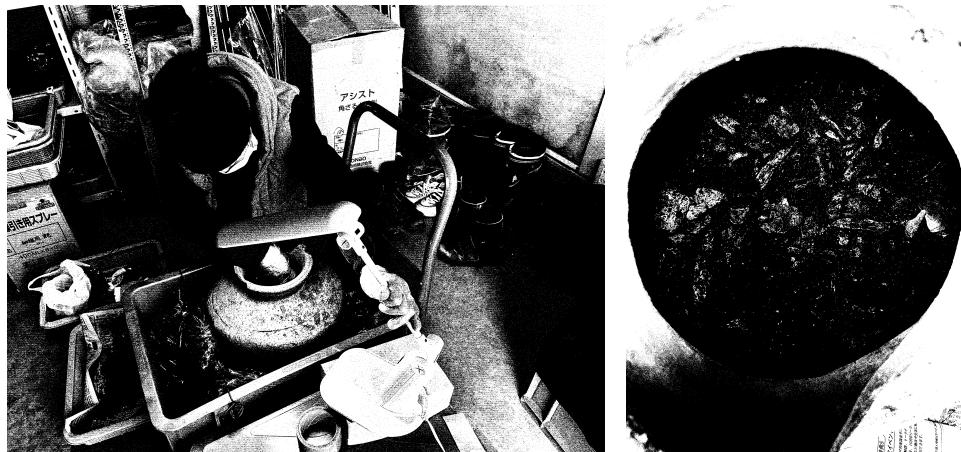


写真1 藏骨器内の骨出土状況と作業状況

坑の壁にそって帯状に検出され、その焼土の内側を掘りさげると全面に灰が検出された。

灰をさらに下げると焼土が全面にみられ、骨や炭化物、鉄製品（釘）などを確認した。焼土と灰が確認された土坑よりやや北東側では炭化物・材が集中して確認されたことから集中範囲として記録した。5 cm弱の木材も確認されたことから、荼毘の所作に使用したものと考えられる。なお、壺の中には焼骨が埋葬されていたため、委託分析を行った。その結果、壮年～熟年の男性1体であることがわかった。石材に関しては、鑑定したすべての礫に被熱痕があり、粗粒凝灰岩類を基本とした石材であった。これは、調査区の北西方向に位置する丘陵を構成している煤ヶ谷亜層群によるものと推測される。炭化材によるAMS分析の結果では、提出した6試料に10世紀代を示す測定結果がでている。提出した試料に樹皮が残存していなかったことから、古木効果が関係すると考えられ、適正な値がでていない可能性が高い。藏骨器は常滑産の広口壺で、口縁の形状等から中野編年による6a型式（13世紀中葉頃）に相当する。肩部に一条の沈線を巡らせその上に径3 cmの円形のスタンプが押印されている。藏骨器よりやや西側で、4枚重なった状態の古銭が出土している。古銭の内訳は「威平元寶（998）」「皇宋通寶（1038）」「熙寧元寶（1071）」であった。周辺を精査したところ、明瞭ではなかったが土坑状のくぼみが確認されており、土坑墓であった可能性が高い。

C1堀の南側（H9グリッド）ではC4中世墓を検出した。破碎された状態の常滑壺が出土し、周辺から礫も数点検出された。壺底部には骨片がわずかに残存していたが、部位等は不明である。壺の年代は、口縁の形状から中野編年による4型式（13世紀第2四半期頃）と判断される。常滑壺は、堀の覆土からも出土しており、接合できたことから同一個体である。このことから、C4中世墓の後にC1堀がつくられたことがわかる。

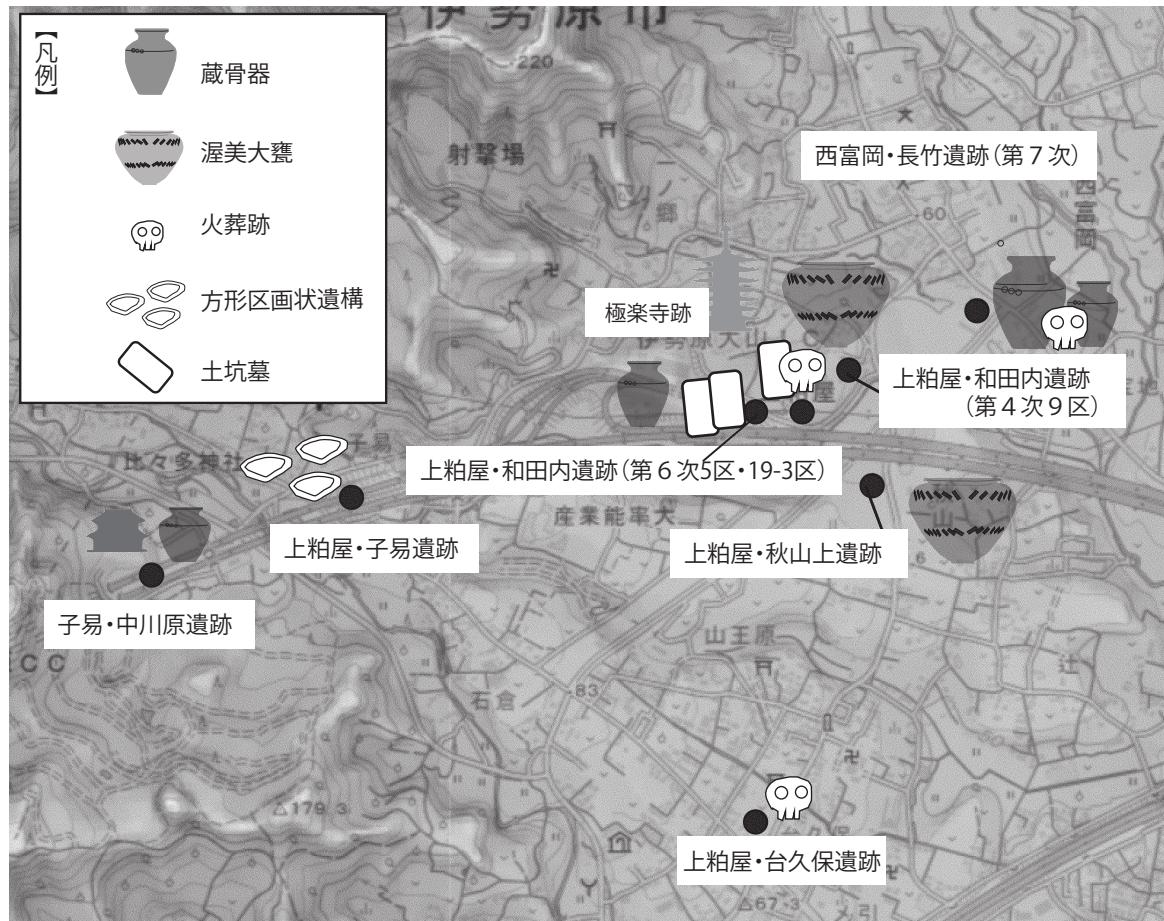
3. 周辺の中世墓について

西富岡・長竹遺跡の周辺では、近年の発掘調査によって中世墓の事例がいくつか確認されており、中世墓が集中するエリアであった。

遺跡の南西に位置する和田内遺跡では、3か所（第4次調査（9区）、第6次調査（5区、19-3区））から火葬墓が確認されている。上粕屋・和田内遺跡は、台地稜線から南に向かう斜面地に位置し、近世から縄文までの遺構が確認されているが、特に中世を中心とした成果は大きく、『新編相模国風土記稿』に記載されている極楽寺と関わりのある遺跡として近年注目されている。中世墓は、斜面地にあたる部分から、2か所

で確認されている（脇ほか2016）。いずれも斜面地を堅穴状に掘り込み、ローム面まで平地面を造り出し、平地面に墓を造っている。2か所のうち、北側の平坦地からは土坑2基が確認され、蔵骨器が確認された。蔵骨器は、渥美窯産のもので13世紀初頭頃の製品と考えらる。壺内には人歯と折れた鉄製品があり、人歯の年代は委託分析の結果、15世紀頃といわれている。この他、五輪塔の地輪が出土した土坑もみられる。堅穴状遺構の覆土からは、他に五輪塔や宝篋印塔が出土している。南側から確認された中世墓は、幅11.57m、奥行き6.19mの規模で、集石墓と土坑墓11基が確認された。集石下から土坑墓が検出されており、土坑墓内からは、古銭、かわらけ等が出土している。出土した遺物等から15世紀後～16世紀前半頃と想定されている。この調査地点は「（伝）糟屋一族の墓」の伝承が残る場所でもあり、伝承地で墓が確認された成果は大きい。第4次調査（9区）からは、渥美の大甕が出土している（（公財）かながわ考古学財団2021）。甕は破碎された状態であったため、内容物については不明であるが、甕を除去した下層から焼土や炭化物が検出されており、火葬墓の可能性も高い。第6次調査（19-3区）においては、火葬墓、土坑墓が1基ずつ確認されている（（公財）かながわ考古学財団2021）。南東向きに傾斜した斜面地に造られており、礫が集中する範囲がみられた。礫の集中範囲とその南西側に土坑が検出され、被熱礫、かわらけ、焼骨、焼土、炭化物などが確認されている。調査者の所見としては、茶毬跡ではなく埋葬場所であったと判断している。また、火葬墓の下層からは土坑墓が検出され、土坑墓内からは、頭骨と四肢骨が出土している。

上柏屋・秋山上遺跡でも同様に渥美の大型甕が確認されており、同様に焼土等が含まれていることから火葬墓の可能性が高い。また、上柏屋・上久保遺跡からは、灰や炭化物主体の覆土の堅穴状遺構が確認されて



第4図 上柏屋周辺火葬墓分布図

いる（伊勢原市ほか2023）。堅穴状遺構の平面形は長方形を呈し、掘立柱建物跡を区画する溝に壊されるが、墓に関連する遺構の可能性が高いとしている。出土品整理後の正式報告時にさらに明確になるが、発掘調査段階において中世墓が比較的密集していることがわかる。

4. 中世墓とは

中世墓の展開を考えたとき、画期として、①12世紀末頃を中世墓成立期、②12世紀末から15世紀初頭までで「武士階級の営墓がみられる段階」、③15世紀前葉以降の「農民階層に営墓が展開する時期」、と大きく4時期にわけ準備期間と終焉時期を追加して大きく6時期あるとしている（藤澤1996）。これをもとに、神奈川県内の中世墓における画期として佐々木健策は6期に分類した（佐々木2009）。第Ⅰ期（12世紀中頃）は中世墓への準備期間とし、第Ⅱ期（12世紀後半～13世紀後半まで）は中世墓の成立期、第Ⅲ期（13世紀末～14世紀前半まで）は中世墓の第1次展開期、第Ⅳ期（14世紀中頃～15世紀後半まで）は中世墓の第2次展開期、第Ⅴ期（15世紀末～16世紀後半まで）は中世墓の第3次展開期、第Ⅵ期（16世紀末～17世紀初頭まで）は中世墓の終焉期とした。火葬墓や蔵骨器が神奈川県内で増加する傾向がみられるのは、13世紀後葉の遺構が多く、土坑墓も同様であることから、まさに中世墓が展開する時期であるとしている。また、神奈川県内は、古代より相模国、武藏国3郡であったとされ、後北条氏の段階では、相模国を西郡（足下郡・足上郡）、東郡（高座郡・鎌倉郡）、中郡（余綾郡・大住郡・北西部を除く愛甲郡）、三浦郡（御浦郡）、津久井郡（愛甲郡の北西部）の5郡にわけて支配していたとし、その地域的特徴・区分は中世前期までさかのぼるという。伊勢原市内は、この区分でいくと中郡にあたる。

『中世墓集成』（佐々木2005・2007）によると中郡の資料について、2009年段階では12世紀前半から17世紀前半までの墓の集計は、土坑墓301基、蔵骨器4基、火葬墓38基、集石墓73基とある。12世紀前半に土坑墓がみられるのが契機で、13世紀前半頃に集石墓が出現し、14世紀代に増加傾向にある。土坑墓も14世紀中頃からみられ、15世紀後半から17世紀代には主流となる。蔵骨器がみられるのは13世紀中頃からで、14世紀中、後半と続く。中郡エリアは、蔵骨器の墓が希薄な地域であるとされているが、近年の調査数増加をもっても、神奈川県内全体からみた傾向にはあまり変化はないようである。集計した佐々木によると「中郡・西郡における火葬人骨埋葬遺構では（中略）全てが单基ないし2・3基で存在するものであり、墓制を考える上での特徴ということができる」と述べている。伊勢原市内で確認されている事例をみても単独のものが多い傾向があり、これまでの傾向と変わりがない。

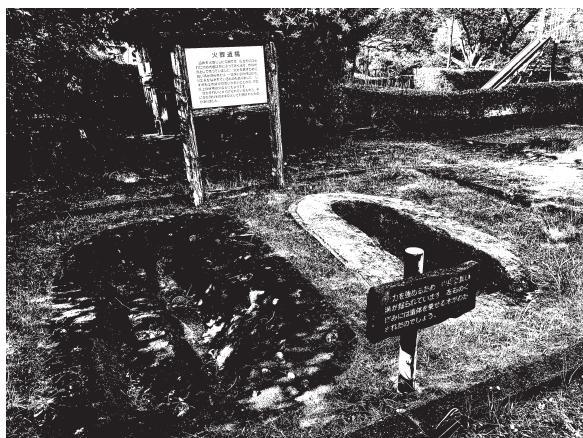


写真2 移築された一の谷中世墳墓群 火葬遺構

1か所で多くの墓形態が確認されている遺跡として、東海地域になるが磐田市の一の谷中世墳墓群遺跡があげられる。一部12世紀に属するものもあるが、基本的には13世紀初頭から17世紀初頭にかけて焼く400年間続く墳墓群で、塚墓162基、「コ」の字形区画墓、集石墓429基、土坑墓277基、が確認されている。この中で火葬の遺構も複数確認されており、火葬から埋葬までの過程がわかる資料が多く検出されている。墓の変遷は、13世紀後半から14世紀前半にかけての大きな画期があり、塚墓から土坑墓、集石

墓へと変化する。一の谷周辺は、遠江国府や守護所が設置された中世の政庁域であった地域であり、墓の主も在庁官人から町の有力町民層の墓所としての変化が辿れる貴重な遺跡である。

火葬の痕跡は、塚墓にはじまり終末期の集石墓までみられる。一の谷中世墓群遺跡では、火葬の形態を大きく①土坑状をなすもの、②土坑を穿たず平面的に火葬を行っているもの、③石を立体的にくみあわせたものの、の3種に分類している。土坑状をなすもののうち、隅丸長方形、楕円形、長楕円形の3種にさらに大別される。傾向としては、隅丸長方形から楕円形化もしくは不整形化しているようだ。火葬の中には、強く焼けた土坑上部に埋葬のための集石墓が造られているものがあり、このことからも火葬の回数は1度と判断されている。西富岡・長竹遺跡の事例をみると、楕円形の土坑状の掘り方があることからここで火葬され、火葬後に集石墓を構築しているパターンにあてはまると考えられる。地形的には斜面地部分にあたり、奈良・平安時代ごろまでは非常に湿潤な環境にあった場所である。このようにぬかるんだ場所であったところを平坦に造成し、火葬を行ったと考えられる。また、火葬を行った場所の脇に炭化材が集中する箇所を検出しているが、『善信聖人絵』をみると、火葬が終了した後、炭をまとめている様子が描かれており、火葬箇所に近接した場所から炭化材が集中して検出されている事象を考えるヒントとなる(狭川2011)。荼毘に付した後、全体を埋めてさらに平坦に構築し、蔵骨器に骨をおさめ集石墓を造ったのだろう。また、一の谷中世墳墓群遺跡では、平坦に削り出した地に柵列が設けられた火葬跡があり、西富岡・長竹遺跡のH8・9グリッド付近で確認された焼土だまりと柵列の構造とよく似ている。周辺からも、焼土が散見し、またC1中世墓とやはなれた位置にあるC4中世墓などもあることから、長竹遺跡内において複数の火葬を行った場所があつた可能性は高く、蔵骨器を使用した墓が2~3基あったことが考えられよう。一の谷中世墓群遺跡での見解では、火葬後に骨を取り上げる行為は各遺構に共通してみられるが、古くは上部に埋葬施設を設けていたものが、その後火葬の場と埋葬の場が別々になっていったとしている。

火葬骨を埋葬する器として、渥美や常滑の大甕を使用し埋納した事例が全国的にもみられる。上粕屋地区でも2か所で確認されており、先の事例としてもあげている。集落の一角で確認されることが多いとされているが、2か所の事例も該当する。

墓の形態として伊勢原市内では、他に方形状の区画を示すものもある。上粕屋・子易遺跡からは方形区画状の遺構が3基確認されており、焼土や人骨等は特に確認されなかつたが、かわらけが区画溝の中から出土している。掘立柱建物が密集する付近より北西側に位置し、さながら屋敷墓のような位置づけができるだろう。方形区画状の遺構は、本来塚墓のようなマウンドのある可能性が高く、時期は13世紀代に相当すると考えられる。

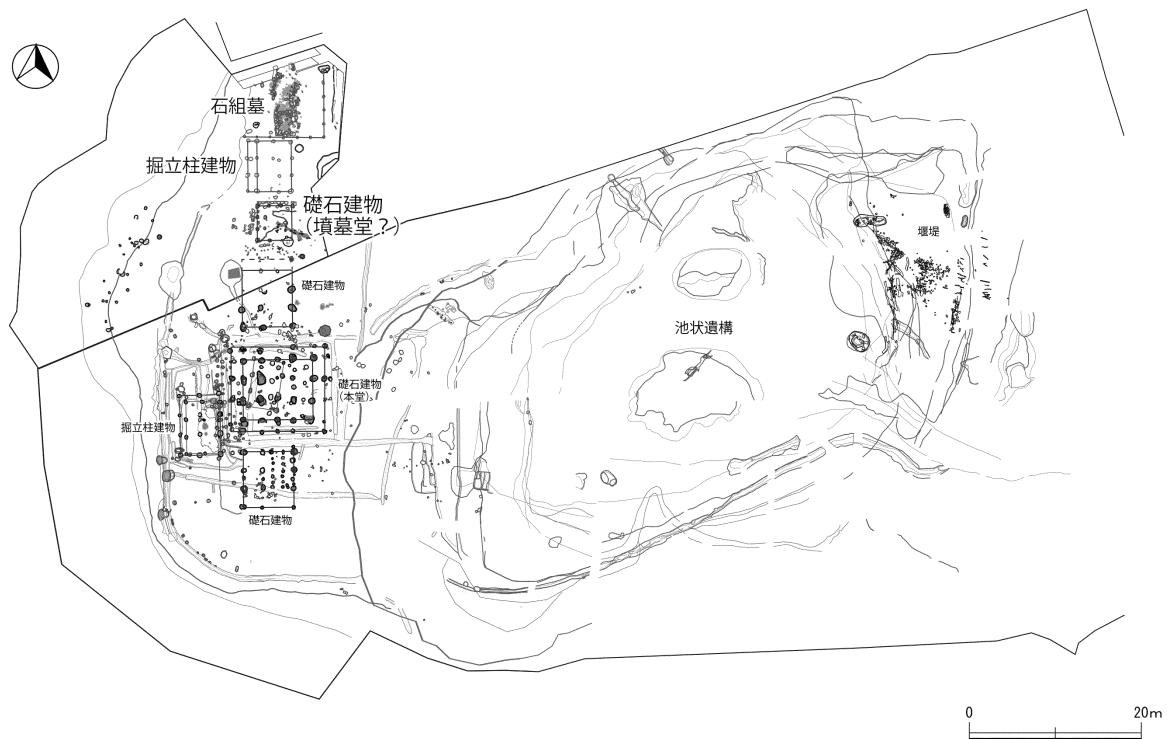
5. おわりに～中世の人々のあの世～

火葬そのものは、古代からはじまった行為で8世紀前半には行われていたとされる。僧・道昭がそのはじまりとされるが、奈良時代から平安時代中期ごろまでは官人層を中心に行われていた。律令体制が地方まで行き届かくなり、この墓制は崩れていくのであるが、中世になると再び火葬が主流を占める。しかし、火葬の対象者はいざれにしても一般民衆ではなく、在庁官人や僧侶など身分ある人が対象であったことがわかる。

今回取り扱わなかつたが、子易・中川原遺跡では中世寺院跡から墓域が見つかっている。中央に大きな四面庇の礎石建物があり、その両側に規模のやや小さい礎石建物が左右に検出された。中央の建物は、周囲よりやや高く基壇上に建てられており、前面に向拝と四方に庇を有している。建物の規模は、南北3間（約7.2

m)、東西4間（約8.4m）を測る。両側の建物は、南北3間（約6.4m）東西2間（約5.8m）で、左右対称の配置で、中央の建物の西側（裏手）にも南北3間、東西2間の掘立柱建物址が検出されている。三棟並ぶ礎石建物の北側から、さらに礎石建物や掘立柱建物、石組墓がみつかっている。礎石建物は、東西3間、南北3間で一辺が約4m、地山を削りだした基壇上に礎石が配置され、基壇の周囲には縁石が並べられていた。建物の中央には、下半部のみが残存する常滑産の大甕が2個体みつかっている。上半分は土砂が流出した際に流れてしまい、現存していないが、内部に火葬骨が含まれていた。礎石建物の周辺からは、複数の釘が出土しており、礎石建物の屋根構造が、瓦葺きの建物ではなく、柿（こけら）ないしは板葺きであった可能性が高い。礎石建物の周辺からは、釘だけではなく、金箔も土に混じって出土している。石組墓は、3基確認された。長方形の大きな石を二段に配置し、内側に丸い扁平な玉石を積み上げている。玉石の中には、お経を書いた石（礎石経）もみつかっている。礎石建物と石組墓の間にある掘立柱建物は、東西2間、南北2間で西側に庇のある建物が検出されており、規模は東西約5.8m、南北約4.9mを測る。標高127mの位置に谷奥の斜面地を削平して平場をつくり、伽藍を造営している。子易・中川原遺跡の事例は、領主クラスの墓と考えられ、今回取り扱った中世墓の事例とは別格である。同じ伊勢原の地で、「火葬」後の埋葬される形態が異なる事例となり興味深い。

西富岡・長竹遺跡でみつかった蔵骨器の主はどのような人であったのだろうか。人骨鑑定では、かかとの骨が非常にすれていたため、よく歩いた人ではないか、との結果がでている（註2）。当時よく歩く人、というと単純な筆者は僧侶が頭に浮かび、また近接する場所に極楽寺想定地があることを考えると、まさしく極楽寺に関連した人ではないかと考える。約900年の時を経て、再びおこされるとは思ってはなかっただろうが、骨からわかることは多々ある。骨から発せられる言葉を一つ残さず還元していくのが、我々の使命と考えている。



第5図 子易・中川原遺跡 寺院遺構配置図

【註】

- 註1 今回明記している遺構名は調査時の名称であり、報告書刊行に伴う出土品整理作業時において名称は変更となる。
また、遺構の解釈についても、あくまでも調査時所見である。
- 註2 梶ヶ山真理氏鑑定、ご教示による。

【引用・参考文献】

- 東国歴史考古学研究所・帝京大学山梨文化財研究所1995『シンポジウム 中世の火葬 - その展開と地域性-』資料集
磐田市教育委員会1988『一の谷中世墳墓群』
- 坂本 彰1989「港北の中世陶器 - 火葬墓・経塚出土品を中心として -」『調査研究集録』第6冊 p 59-134 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井進・萩原三雄1993『中世社会と墳墓』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 名著出版
- 磐田市教育委員会1993『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市水堀土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 本文編
笹生 衛1995「東国における中世墓地の諸相 - 房総の事例を中心に -」『千葉県文化財センター紀要』16 p 433-461 千葉県文化財センター
- 藤沢典彦1996「中世後期墓地の諸問題」『中世考古学を語る会』中世土器研究会 ほか
伊勢原市教育委員会2001『史跡と文化財のまち いせはら』
- 浅野春樹2004「第2章 南関東の中世墓と埋葬」『中世東国世界2 南関東』 p 253-274 高志書院
- 佐々木健策2009「南関東の中世墓」『日本の中世墓』 p 235-246 高志書院
- 狭川真一2011『中世墓の考古学』高志書院
- 中野晴久・安井俊則2012「第4章 特論 第1節 押印・刻文」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』 愛知県
中野晴久2012「常滑窯の展開」『知多半島の歴史と現在』日本福祉大学知多半島研究所
- 脇幸生・菊川泉2016『上粕屋・一ノ郷南遺跡 上粕屋・和田内遺跡』かながわ考古学財団調査報告312 (公財) かながわ考古学財団
- 松葉崇2017「大山山麓に広がる中世遺跡」『発掘された中世の姿』平成28年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富永樹之2022「広がる仏教信仰 - 古代末から中世前期の経塚・墓制を中心に -」『時代の転換点に生きた相模の人々の暮らし - 古代から中世へ -』(公財) かながわ考古学財団
- 伊勢原市教育委員会・(公財) かながわ考古学財団2023『第35回考古資料展 「伊勢原の遺跡」 令和4年度 遺跡調査報告会』
(公財) かながわ考古学財団 2021～2024 『年報』27～30

【図版出展】

- 第1図 筆者作成
- 第2図 『年報30』より一部加筆
- 第3図 『年報29』より引用
- 第4図 小川岳人氏ご教示、筆者作成
- 第5図 松葉2017より引用

【写真出展】

- 写真1 筆者撮影
- 写真2 筆者撮影